

皆様からの善意とともに 女優・栗原小巻さんと水田理事長 対談

福祉の文化
定着させたい

必要な人々に
支援の手を

一般寄付50億円
義援金103億円

創立50年を迎えたのを機に、水田邦雄理事長と女優で事業団評議員の栗原小巻さんがその歩みを振り返りながら、今後の展望を語りました。(2021年8月収録)



くりはら・こまき 女優。
2009年評議員就任。日中文化交流協会副会長・理事長。代表作に映画「忍ぶ川」(1972年)、NHK大河ドラマ「黄金の日」(78年)、舞台「松井須磨子」ほか多数。

——事業団の活動実績を振り返って、その意義をどう考えますか。

理事長 アイバンクや重症心身障害児支援など個別事業を継承しながら、2001年に社会福祉法人となりました。読売新聞グループの社会福祉事業を担い、05年からは高齢者施設を自ら運営し、老人福祉を実践しています。

助成事業のほとんどは読売新聞の読者の皆様からの寄付金です。この50年で事業団に寄せられた一般寄付金は約50億円、災害被災者支援の義援金等への寄付は約103億円に上ります。これまで支えてくれた読者の皆様にこの場を借りて厚く御礼を

申し上げたい。なによりも読者の皆様の善意があって初めてなした50年だと思います。

栗原 事業団のご活動には、2本の柱があると、ご説明をお聞きしています。一つは福祉活動に関わる支援の助成。もう一つは直接的な社会福祉事業の展開。私自身、微力ですが、関わらせていただいて18年、ご活動を目の当たりにして事業団の皆様への社会への貢献、高齢者の方々への尊敬と愛情は頭の下がる思いです。

一昨年、実際に事業団が運営する高齢者施設をお訪ねして、深く思いを致しました。応援と実務、この2本の柱は読売新聞グループの2本の柱にも感じます。



みずた・くにお 1949年生まれ。73年厚生省入省。厚生労働省大臣官房政策統括官(社会保障担当)、保険局長、厚生労働次官を歴任。2018年3月、読売光と愛の事業団理事長に就任。神奈川県出身。

——これまでの事業団の活動で記憶に残るものは。

理事長 新聞社が母体の団体ですから、災害救援活動は非常に重要です。阪神淡路大震災では40億円、東日本大震災では29億円を集め、被災者支援を行いました。今では集まった義援金については、経費を事業団と新聞社が負担し、全額を被災者に贈っています。また、被災者の直接支援は奉仕活動の最たるもので、2年前からは被災地に入って救援活動を展開する技術系の災害ボランティア団体への支援も始めました。重機などを駆使する救援活動は大きな力となっています。

栗原 障害を持った方々と、健常者の方々ととの交流を積極的に行い、若い方のボランティア育成に力を注いできました。素晴らしいことだと思います。日本テレビ系列で制作放送された『大河の一滴』(1982年)、わたくしにとって忘れえぬドラマ、代表作の一つです。その時、様々な障害のある皆様と出会い、生命の美しさを教えていただきました。この作品が、社会の中での福祉の重要性を教えてくださいました。事業団の活動からは視覚障害者支援の国際交流、アイバンク設立など学ぶことばかりです。

理事長 新型コロナウイルスの感染拡大に際しては、読売巨人軍の皆様の寄付を契機として医療従事者支援を掲げ3億円の寄付金を集めました。時代をとらえた救援事業も大事です。

——これからの社会福祉法人に求められることは。

理事長 時代とともに助けなければならない方々は変わっていくこともあります。時代の社会的弱者はだれか、と問い続けながら支援のあり方をたえず模索すべきだと思います。

栗原 社会福祉法人には税金の優遇措置があり、組織自体が公

的な存在です。責任も重大です。光と愛の事業団には文字通り希望という光と大きな愛があります。私は、事業団に関わっている全ての皆様が大きな責任を果たしていると強く感じています。

理事長 阪神淡路大震災、東日本大震災と相次いだ大災害を契機にボランティア精神が飛躍的に高まりました。企業もボランティア休暇を認めるなど、社会を挙げて奉仕の精神を育てようという機運も感じます。その流れをさらに大きなものとしていくために社会福祉法人は先頭に立って、その役割を果たすべきだと思います。

栗原 貧困と格差は今、全世界の問題です。社会福祉法人の役割は限りなく広がっているように思います。支援を必要としている全ての人々に手を差し伸べる、誠実な心と真摯(しんし)なまなざしが常に期待されていると思います。このことは『ともに励まし合い、助け合い、支え合う』という事業団の理念につながっていると感じます。

——今後の事業団の活動で力を入れたいことは。

理事長 読売福祉文化賞は福祉を文化として定着させようとしている団体を顕彰する、という考え方で表彰をしています。福祉活動が社会の文化として根付くよう、事業団も根気強く活動を続けていきたい。

栗原 事業団の活動方針は全ての人々にとって暮らしやすい社会の実現とあります。その前提となる豊かな心を持った社会の実現、俳優として努力する所存です。

高齢者施設をお訪ねして感動しました。人生は輝いている、生命は輝いている。施設に住まわれている方、そこで働く方、(みなさんに) マザー・テレサの愛を感じました。

昨春大学を卒業 「奨学金のおかげ」と臼井さん

郡司ひさる奨学金を受け、2021年春、獨協大学を卒業した臼井咲葉(さよ)さん(23)は、外資系生命保険会社で働いています。支給された奨学金は4年間で240万円。臼井さんは「奨学金のおかげでアルバイトに多くの時間を取られず、思い切り勉強が出来ました」と振り返ります。



母子家庭で高校入学と同時に都内の児童養護施設に入所。大好きな英語を学び、それが生かせる仕事に就きたいと進学しました。在学中は授業だけでなく、国際親善のサークルに所属するなど英語漬けの日々。2年生の夏には米国・テネシー州の大学に9か月留学しました。「日本語を話すようには自分らしさを出せず、うまくコミュニケーションを取れずに悔しい思いをした」ともいいます。努力の甲斐あって、卒業時にはTOEIC905点という好成績を残しました。

2年ほど前からは、日米両国の社会的養護を経験した若者同士が交流するNPO法人に入り、「児童福祉の向上のために発信していきたい」と話しています。

南洋諸島眼科医療団に参加 村上さん 大きな意義実感

東京都内の眼科医村上喜三雄さん(73)は、南洋諸島眼科医療団の一員として1989年の第8回から最後の19回まで参加しました。先輩の医師で団長だった故・山本由記雄さんからの誘いでした。「行くのが当然と思いました。山本先生たちは太平洋戦争の戦場だった南洋諸島の方々へのお詫びと考えていたと思います」と振り返ります。



医療団の派遣先はミクロネシア連邦、マーシャル諸島共和国、パラオ共和国などで、医師、看護師ら延べ897人が参加、2万4681人を診察し、1715件の白内障などの手術を行いました。

手術を1日10件以上したという村上さん。手術翌日の回診で「よく見えます。ありがとうございます」と患者から言われ、感無量だったといいます。「あの頃は医療体制が整っておらず、出向いて施術することに意義があった」と医療団派遣を評価しています。

読売福祉文化賞 スマイルクラブ 受賞で活動の幅広がる

第6回(2008年)の読売福祉文化賞を受賞したスマイルクラブ(千葉県柏市)の大浜あつ子理事長(65)は「受賞で私たちの活動が社会に認められたことが自信になり、その後の活動の原動力となりました」と話します。



障害児も一緒に運動を楽しみ、「運動が苦手な子の教室」などを開催してきました。障害のある子どもを放課後等デイサービスの一環で個別指導する塾も始め、活動の幅は広がっています。会員は800人に増え、「欧州のように障害者スポーツをもっと身近なものにしたい。これからはSDGsへの取り組みも応援してもらえれば」と事業団に期待しています。

被災後の支援で事業を早期再開 宮城・女川のきらら女川

(年齢・肩書などは2022年3月現在)

宮城県女川町でサンマを使ったパンやかりんとうなどを製造・販売している障害者就労支援施設「きらら女川」。東日本大震災による津波で建物が流され、通所者2人が行方不明になりました。



当時施設長だった松原千晶理事長(60)は、早期再開を目指して奔走。事業団からの500万円を含め多くの支援金が集まり、高台に作業工房を建設、2013年に事業を再開できました。事業団はその後も店舗の内装費など計500万円を助成しました。

松原さんは「被災後、通所者は数人しかおらず、そんなにお金をかけてまで再開する必要があるのかも言われましたが、障害者の働く場が暮らす場所がないというのはおかしい。そこを理解して力を貸していただけたことがありがたかった」と振り返ります。再開当初13人だった利用者も今は24人。工賃も月5万円近く出せるようになりました。子ども食堂も始め、「地域になくてもならない存在にしたい」と張り切っています。

